たようなものです。それをツルハシと炭スコップで取り除くと、今度はロシヤ人のハッパ係の人が来て、長さ一メートル、電気ドリルで二メートル間隔おきに石炭に穴を開けて、ダイナマイトを差し込んで、最後に導火線に自分のタバコの火で点火してから安全なところへ待機する。大事なことは、ダイナマイトの数が何本爆発したかを数えることです。全部爆発が終わると、ハッパ係の合図で仕事にかかるのですが、まず最初はコンベヤーに山盛りになっている石炭の中に若干ではありますが、泥炭が混じっていますから、それを急いで取り除く作業が大事で、その後は大きな石炭用のスコップで下のベルトコンベヤー目がけて石炭を投下する作業になります。

下から吹き上げる石炭の粉で、顔や鼻の穴や手等は真っ黒になります。次の交替の組に作業を申し送るのです。この作業は三交替制ですから、一週間交替で繰り返している。

シベリアの気候は五月ごろ三十センチくらいまで土が解けてきますが、種まきは六月ごろ、コルホーズから馬鈴薯の種まき植え作業があります。七月は短期間ですが、夜十一時三十分に作業班の整列時間ごろ外で新聞も読める明るさです。また冬は粉雪で二センチくらいで、寒さは厳しく体感温度風速一メートルで一度下がるので、六十度になると鼻の先が白く凍傷になるので、相手の鼻を見合わして確かめます。

私はこのような体験で無事帰れた。四年間の生活は長かった。

生きて帰ろう

高知県　清水清助

昭和十四年に渡満し、北安省克山県公署に勤務していた。

ところが、終戦の二十五日前に、最後の国民兵召集にかかり、チチハルの工兵第一四九連隊に入隊した。そこで突然、ソ連軍の空襲を受けたのが終戦の四、五日前、わけのわからぬうちにソ連軍によって武装解除され、チチハルの兵器廠へ収容された。

ここに一か月ぐらいいて、興安嶺の日本軍陣地の爆破作業に行くこととなった。それがすめば帰国できるということで、喜んで出発した。チチハルから炎天下を約一日行軍した。これは私にとって生まれて初めての経験だった。汗が塩になることも身をもって知ることができた。

着いたところは何かの大きな施設で、そこに大きな木が生えていたのを記憶している。そこで約一か月足らず生活したが、食糧も燃料もない。何本かの大きな木が燃料のため切り倒され、丸裸になったことが鮮烈な記憶になって残っている。

再び興安嶺の陣地爆破といって有がい貨車に乗せられた。私たちの仲間は現地からの召集兵で、全満から同じ年配（当時二十八歳ぐらい）の者が集まってきているので、駅の状況などよく知っていて、その話によると、汽車は北へ向かって進んでいるという。そしていつの間にか興安嶺の駅を過ぎたと言い出した。汽車の中で、みんなが不安な気持ちで、どこへ連れて行かれるのか疑心暗鬼に包まれていた。

貨車に乗って一週間近くになったころと思うが、ある駅に着いたとき、年若い小隊長が突然「この汽車はソ連へ入る」と言った。そのときの車内は一瞬シーンとして、凍りついたようだった。

兵器廠からの行軍の途中で、落伍しかかったある兵隊が、発狂して死んだと友人たちが話し合っていた。その男は「俺たちは捕虜になる」と叫んで倒れたというが、狂人といわれた男がよくも言い当てたものだと思い起こしていた。私たちは夢にも思ってもいなかったのに……。

こうしてソ連領に入り、駅々でとまりながら、ある駅でおろされた。そこはチタから約二百キロ西のシベリア、ザバイカル州、ペトロスキーというところだった。そこの収容所に入れられた。外側は板囲いで有刺鉄線を張りめぐらし、四方に望楼があってソ連兵が警戒に当たっていた。

約二年間、この収容所で生活した。作業は整地作業、穴掘り、伐採作業、セメントブロックづくり、石山からの石の切り出し作業、石割りなどだった。日課は弁当を

持って作業に出て四時ごろ終了、収容所に帰る。食事は作業別にノルマに応じ支給される。私は体が弱くて軽作業に回され、パンの量も少なかった。最初は酸っぱくてまずいと思った黒パンが命の綱となった。収容所生活の中では、食べることと、日本へ帰ること、この二つしかなかった。一切れというにはあまりにも小さい小さいパンと薄いスープ。油の浮いたスープ、実はほとんどない。たまにあるとすると、ジャガイモ、キャベツの切れはし。困ったことには、ジャガイモがにがくてみんな吐き出した。時たま塩漬けの青いトマトが出ることがあった。私の頭に残っているのは、人間がギリギリの線で食うという問題にぶつかったとき、倫理とか教養とかは一切なくなり、けものじみた気持ちになる。豚の餌にする残飯を食べようとして懲罰を受けた者もあった。

餓死は聞かなかったが、栄養失調が多かった。私自身も二回かかった。軍医の診断で栄養失調となると作業には出ない。オーカーといって所内の便所掃除をやる。

栄養失調になると何でも食べたくなる。私の体験でも、ソ連の事務室の前を通っているとパンが落ちている。あっ、パンだと思って引っ返してよく見たら、なんとれんがの割れであった。それほど食に執着するようになる。

重傷の場合は病院へ入れられる。病院へ入ると帰ってこない。だから重病人でも病院へ行くのはいやがった。

作業の中でキャベツの苗を植えに行った。双葉のキャベツの苗を隠して持ち帰り、おひたしにして食べたが、これほどおいしいものはなかった。青いものにかつえていた。

楽しみといえば、作業が済んで寝転がっておることぐらいかもしれなかった。ソ連二年間の抑留で何を得たか、ふり返ってみると、衣食足りて礼節を知るという中国の言葉は真理だと思う。食が一番。できるだけ体をいとうて、できるだけパンを確保して、生きて日本へ帰ることだった。話は食べることと、「生きて帰ろう、生きて帰ろう」というのが、毎日々々の繰り返しだった。

作業へ行き来の中で見たソ連の労働者の姿も、極めて貧しい服装をしていた。ソ連も戦争で疲弊していたのだろう。

いよいよ二十二年五月帰国ということになり、チタ収容所、ナホトカ収容所を経て、六月二十二日ナホトカ港を出た。

舞鶴入港二十五日、二十六日上陸、生きて帰り着いた。同時に、港内を星条旗をつけたボートが走っているのを見て、敗戦国だという実感がわいた。

そうそう収容所にいたころの話だが、二十一年十二月にハバロフスクで編集発行している日本字新聞を見た。その記事に日本で大地震があり、室戸岬の灯台が海没したという見出しが目に入った。

そこで舞鶴に上陸したとき、援護局の係官に高知県の状況を聞いた。自分の家が海没したんじゃないだろうかというと、そんなばかなことはありませんよ、と笑われた。

高知の町が空襲を受けて焼け野が原になったということは、大阪の兄の家へ寄ったときに聞いた。

生まれ故郷の宇佐の町へ七月一日帰ると、家内も無事に満州から引き揚げて帰ってきていたので、ほっとしたことだった。

悔恨の思いで

岐阜県　厚見　茂

北満チャムス在住の日本人、最後のハルビンへ向かって避難する列車に同乗して、邦人警護の命令を受けて西進し、八月十八日朝、綏化駅で初めて日本は十五日、無条件降伏との悲報に接し、直ちに全員下車、綏化飛行場の格納庫に収容され、敗者の哀れな生活が始まった。

やがて、ソ連による武装解除、日本軍の糧秣をソ連へ運ぶための貨車積みに狩り出され、歯をくいしばって黙々と従った。

ソ連は、軍人のみはウラジオストック回りで帰国させるから、それまではソ連の指示に従えとの甘言で、日本兵の暴動、逃亡を押さえていたらしいが、部下には何も告げず、少しでも心を休めている姿を見守って、軍歴は少ないが、応召のときは士官勤務適任証書を受領していたため、これからが頭を使わねばならぬと重責を自覚し